

河内其様子をみてお垣打掛登んとせし弾塔大河内
 押のけ先(せり)りたる次大河内より其次清水乗より様別
 踏おり其より四五間西上様よりけ豊徳九津見宗たる跡より
 大勢我者らりと押合操合ける極小舟の様おりりたる大河
 内大音揚其旗早く入りやと云々お津見元来旗をり
 るれおと云てお心をあはせ様を短一峰高入りて見えけ
 る者共人の肩に乗て持上り八月十五日の夜亥の刻りりの
 事より只五人先宗一太音聲を挙て南原の城一音宗太音
 飛弾と名乗面我名と名をて関のありとをいりりたる
 飛弾より二幅紺比白く丸の内大文字漆付し旗五本塔

中の焼る矢倉の陸立忍西の夜風ふ籠一諸軍の鏡と頭より
 城中俄の関の聲お絶ふ峰裏の軍兵悉く裏崩して鉄釜き散
 ると思の外お乗破り内を突きけし飛弾も元来武勇や奴の天
 將多れ軍兵と立僅い南大音の太門と舊池お乗入り貴志六
 太史一音首の高名も三の丸お池にて早八方を焼討し如佐渡も
 が先多孫堂仁左衛門尉同新七郎同他兵衛村藤島與左衛門尉白地お日
 の丸お置する一流の長旗を先お立おびくとお入る腋坂中務少輔
 が紺地二幅の折りけお白き輪遠の付る五本の旗浮田秀家お止ま
 浮田左京亮戸川肥後引續お乗入り尤も向城内々餘烟十方お
 散乱せしおば籠兵途を失ひお指て逃るるあり多し西表の小

西橋津もが攻めと散り切拂て退きける殘精兵方と馳散て入丸
 是様合せ火を吐てを戦ひ大河内も向敵二人討て今日八月
 十五日赤木氏神大菩薩の淨會日小島まると屹度思出て勇力を
 打捨紅赤流るる堂を合て遠く日本さぞ洋々たる相鼻とて其是
 の鼻紙入小差多とある士町小駈出て見ると敵五十騎計真黒不備
 あり大河内何なりと見ると傍輩一人も入らば浮田が軍士三人有り
 大河内彼小向てあの敵も馳向んと云々此は浮田が軍士をあの五
 十騎計の軍兵小成立の士三人駈合て何の用も成合ふ先ず小
 拍く味方を待掛り恰と制しけり是のまにひぢらおまふ立みた
 る如小彼五十騎計の敵兼通る大河内二尺半の刀を以て馬上の敵

の右の股を切て落し只一討めて股たきは落し敵は左に落し
 一とあつりに立ちし士共其首を奪ひぬぬ馬上の敵をばけり
 三人切落し四人不當の敵を切られ股の皮も討掛る左に落
 けるを大河内其流を奪ひ下と走りあふと續て乘退敵の
 小島れれおびる其河に又首をも奪ひけり斯りける所小傍
 輩長田五兵衛尉打後ま在られ大河内田中が左邊に耐ふ向ひ
 ぶら長田が名をば後まけりとい見たり力を添へしといひけり
 田中尤も馳出るれりも騎馬の敵二人出来り乘退知を田中鎧
 提て血をばき突くは敵もよよと向中が鎧をひひけりのみ十四
 五間計引どり候して馬を早めて退たりま人の敵も大河内

弘文のいけるを敵馬はとんはふあき後松ふ叙を抜て切拂ひ掛通
らんとを敵の叙先大河内の手の甲に寄り切り刀を片と切
あて一鞭打て来りける敵の馬東方へ歩きまきバカあく討ち
しぬ大河内長田向て此ハカあ一歩を切ても如何多きと某が
高名を以てさふまの違とて長田ふらの内を違ぐる長田大ふ
後てぬ雅き山へ入るとを載るぬ其よりけ彼ふ働して傳束小池行
八郎近藤甚な村深井を在馬村を合ふれ大河内四人の丸ふ
駈たぐるふ梁間五六回ふ棟の十アアさうかん丸ふたふ家あり大
河内丸ふり見るに中中ふ人まふふ一縁のささ六尺計有て四
方壁ふ塗まきり其壁を蹴けふ一見まき長七尺八寸の太男真黒

ふ鑑ぐる朝鮮人三人餘りの大太刀を抜殺ち切て山深井十文字
を以て渡と突如とや何しとまん朝鮮人達の袖よりし草
の貫行を引切て中より抜打捨ぬ二番ふ近藤二天計の中身鎧
を以て突なまきまきまき袖よりし中へ中へ分計抜け太太刀打
振て切掛りし内見まきば只仁王の賜き出るとく如何なる天魔鬼
神より共欺く程の懸ありし四人とも切立まきまき何事もさし
押身を見えたりれば共十六夜の月を赤く澄澄の四方檜家居ぬ
の光より白雲のともりやう成ふ船て大河内をて返るを被大男
抜めうける大太刀を以て大河内が推形の甲のさるまうけ建渡
六寸計切破二の大太刀を射向のいで當よりの先の籠まきまき筋

明神物語 卷下

遠く切付て又其手の小を續けて二刀切付り味方の勢は切き
くめり大内為方を失ひしう飛入て敵の面刀を切付れり
少しひらむと飛掛り突刺し上は穿き胸板刀を突立三三三
貫くと息きれ居るはまゝ小池敷に命歸りまて敵の胸板小
突立る大内内刀のまゝを度けて三刀切て鋒を打退し大内
内が弓手の大指と三つよ切破大内敵の刀を奪て立上り雖も
ても手とてくくく人あゝ急き此首を奪はし奪首を奪掛て
味方打退る臆病者飛驒も披露して切腹せんと思ふは源
井志左衛門尉来て大内内腹立を極せりひらむと怒思はし
一葉を初て巻く退るをいも返し命若車の手柄を奪て

獲く此者も手掛るもの有りや六助あゝ鼻挫て大内内が若黨と
持せよと云々る源考六助といふは輕豊で腕差と披露とあり
んと大内内彼死骸を見まは錦の襪より錦と云々る事
朝鮮少て平人の罪と云々聞かば何し六助其軍士の出立
自餘の軍兵も替りたり其首小池を其源井が共共と云々付
て云々しと云々れば深井尤うりとも青と共小頭を削て大内
内が若黨掠本三藏小持きて大内内其具足肩小うけ来る
しと云々れば三考引立んとしけ共中と重く持得せんバ
切つて半分持せり然るは津須賀阿波の勝豊が軍兵鐺本よ
里刀を打来て大内内が討たの刀をとりあく清明日八早と返并

申さるゝと云一が終ふ返さるりけり此時飛驒も一吉家中の
 士より知して回東西各舟の軍勢今と盛と乗入るるをせごと
 見たり予軍士の番衆の柄付して高名も構ふ首級十
 五二十の外に入ん其上和漢の古より乗あ早に軍中も高名敷ハ
 むきものかり若味方打河は詮か上下の軍兵引纏ひ子
 の刻の既ふ所は小屋引多家一吉軍士を召て城中付世を
 一諸兵味方の勢を計て是夜付よ来る事も有る一吉の
 番外圍の事も油断さるる足輕共ハ柵の内は諸番小屋て
 篝を上げく燒せ何も馬も放さば盜まば根もさるゝ
 と堅く云付もさるり小池深井近藤大河内少一跡より出

城もさる大河内が道具持ふ今若と云者よ云付繩の端も石を
 付てあだありして乗口の石垣をうせせ本陣も海りたる死隊
 中本陣の白砂も篝火を燒せてまら不斜々きふく四人の
 者も洞と樹も何あ而乗る石垣の高下も覺さるるや各も一頁
 ざらやとさるり深井申るる乗口の石垣只今大河内うせり
 三間半は又二の丸も設て大河内強力者も流し合せ手の甲四も所
 切れりさるり手も矢も二と所首深も射しむるも異儀も
 く敵も討留いと披露も大河内細地の錦の鎧も分も持出
 實檢も入けむ飛驒守も悦喜有て首も明日持出も其も
 あらふも扱也るる必大も盜ものありと覺さるりなは

十六日太田飛騨も小屋へ竹中伊豆も来て備前の人数高名實
 檢有大河内高名爽之洗ひ消ふ包未明より持せぬ小屋
 の入口居たり飛騨も其方高名より注文ふ記しとるり
 大河内ぬり夜中上る如く燈諸人替りて異國本朝限
 らも錦の鎧直垂八平人飛びと申傳へ若大将よてもいし
 備の為然もい生捕の軍兵ふあつて有てい何とて
 て某が身の為ふ申上りふ非ぞとてなまに飛騨も伊豆も尤も
 かくて大河内高名とるまきのものふ載て本陣の白旗ふ居
 置て生捕共を召出し此首の名を知り書認むきゆ通使を
 びてふ閑人生捕共是と見て疑ふもいも氣色も有涙を流す

者もあり一が筆と添て慶州判官馬上二系騎の大將ありと
 てふまより飛騨も大よ候て味方十六万騎ふとて一番紫の
 上ふ割大将を討とる事和漢の誓何事うそふ如ん二人あ
 り柄よりも言上の目録ふ書記とてありとて又大河
 内筆者の筆を押し伊豆も及申上り此首飛騨もあ申
 の生捕計してとるゆはし一言有て後日若大将を討との
 ことひて疑はくも申上り後悔もなきも諸家の生捕をば
 はしとてさし一徳大将も悉く見の上目録ふ記有まや否と
 云伊豆も深く感とて最後の一言ふて無類と思ひに生捕
 はしとて重く尤も極せり所色未若幸ふて飛州の山為ふと

忠たり大田原の首を掛らざりと殊の外少を装らまた家叔あり奉仍より諸大将生捕苦を召連早く来り治と觸ふ随て諸將を驛さぐ本陣集る諸子の生捕を人七替は右の如く書記すこれ則日経ふま付り諸將羨みて大田原を二人前の大田原と感つけ飛驒を伊豆と南原判官は如何小と生捕苦問はるの門より切抜出いとや其の場をばと答ふる夫々諸將皆本陣にゆり一に藤堂佐渡を遅く来て座しるるを飛驒を大河内小指差して如何佐州あの者予が家中小於て一番乗して彼も大将を討つりと云ふも佐渡も大河内小向ては是未若年ふる多重くの多柄ありは是先乗めは能存知くど一死守を

乗より某が某の我輩早うりーと云大河内聞て夫は山寛遠と一我等五人城中小乗入を番主のこ一勝関を揚しを中某の軍兵堀の内堀の外を圍を合せ依る左右の勢續けと云りいふら某もその軍勢未乗入るる某死守もハ三の丸小乗入十方ふ火をうけ焼討致其後諸子よりのことと云ふ事よと答はれ佐渡も心の外小立服一は一番乗と云ら傳りたる一何ゆも難いと高聲に忿怒も大河内聞ていふ佐渡も我も其料といひ東者といひ高居よりやき田舎もの高下の河に如くは其方と汝言葉いん降ん夫甲冑を穿し一我場上降て下馬るは武士の法あふだ其方と云ふその若言小驚某にハあをとりはも亦高く云ふは九津

見清水豊島彈塚未考多也河上佐州諸人眼赤小頭一車我作之
 中ぬ物と云ふ言られ佐渡外に逃る河をぬく刀をぬき出せ
 しける藤嶋與左衛門尉を使者として佐渡方より飛驒方云
 誠々々唯今ハ若き人ハ不卒尔の事を申すけ面目を失い陣前ハ
 里穿鑿ししゆれ彼人の河少少も遠く何とぞ五人の口上を仰せけ
 らし願ハ某ノ乗船も貴老同士の言上ハ於てハ二世の志方志し
 又伊豆守及民部大輔及頼入との趣を藤島直談ハ申上る飛驒守
 五人と云て藤堂方より早くとあり何と云り五人形り遠く日本の地
 を離れ角名城を先乗仕終るく攻落し名譽を流し早くと云
 き藤堂方とも同前との事総令頭を八度別らけ共此先と申

上難く其上の御前よて偽の言上有る爰由は折書紙をよむと
 と承り公儀を掠らる心事も半終るべくいと一同よぞ申上る
 源も藤島方よて更と五人の者共口上を具小使が語る一と云り
 伊豆守民部大輔が云けふい何ハ藤島佐州ハ有様上二番乗の言上
 小記と云づ一と有れば藤嶋畏てゆる既小月録お極るふ飛
 驒守が右筆兼原宗を鷹村長田五兵衛尉左右小畏て日記を記しけ
 る長田守を止る某昨夜討後をやりぬ大河内高名の内を某
 小興いと申上る飛驒守伊豆守民部大輔大感ト大河内能き丸
 せり又長田守がふららるる申す討れしよりい柄あり大河内
 が高名を三ッ長田が高名と云ると記さるると頃々死人の首一ツ

入て日記の教よ是りたり

十六日太田飛驒守竹中伊豆守毛利民部大膳諸軍の高名と実帳

軍中の記よ細小注文よ記々々
一、此而言上高麗南原城慶長二年丁酉八月十五日亥刻落城

一番 太田飛驒守 家中先乗

首二討取 越前國住人 九津見兵藏
内ツ大将 慶州判官

同三 三河國住人 大河内茂左衛門尉
同二 伊勢國住人 豊島金右衛門

同 近江國住人 清水弥一郎
同 南原 伊勢國住人

同 紀伊國住人 貴志六太夫
番乗 一、紀伊

同百十九 飛驒守手

二番 藤堂佐渡守 家中先駈

首三 近江國住人 藤堂仁右衛門尉
三

同三 同 藤堂新七郎

同三 美濃國住人 藤島與左衛門尉
尉

同三 近江國住人 藤堂作兵衛尉

同二百六十 佐渡守手

首數六百二十二 備前中納言手

以上南表三頭合首數千一

首數六十四 竹中伊豆守

首數八百七十九

小西攝津守

同 九十一

脇坂中務大輔

以上西表三頭合首數千三十四

首數五十一

加藤左馬介

同 四百二十一

羽柴兵庫頭

同 四百六十一

歸島出雲守

同 十八

菅三郎兵衛尉
同右衛門八郎

以上北表五頭首數合九百五十一

首數四十

毛利民部大輔

同 四百六十八

蜂須賀阿波守

同 十一

生駒雅樂頭

同 八

生駒讚岐守

同 五十

毛利壹岐守

同 三十

毛利豐前守

同 三十五

相良左兵衛佐

同 十七

島津又七郎

同 三十五

秋月三郎

同 二十五

高橋九郎

同 二十一

伊藤民部大輔

以上東表十一頭首數合七百四十